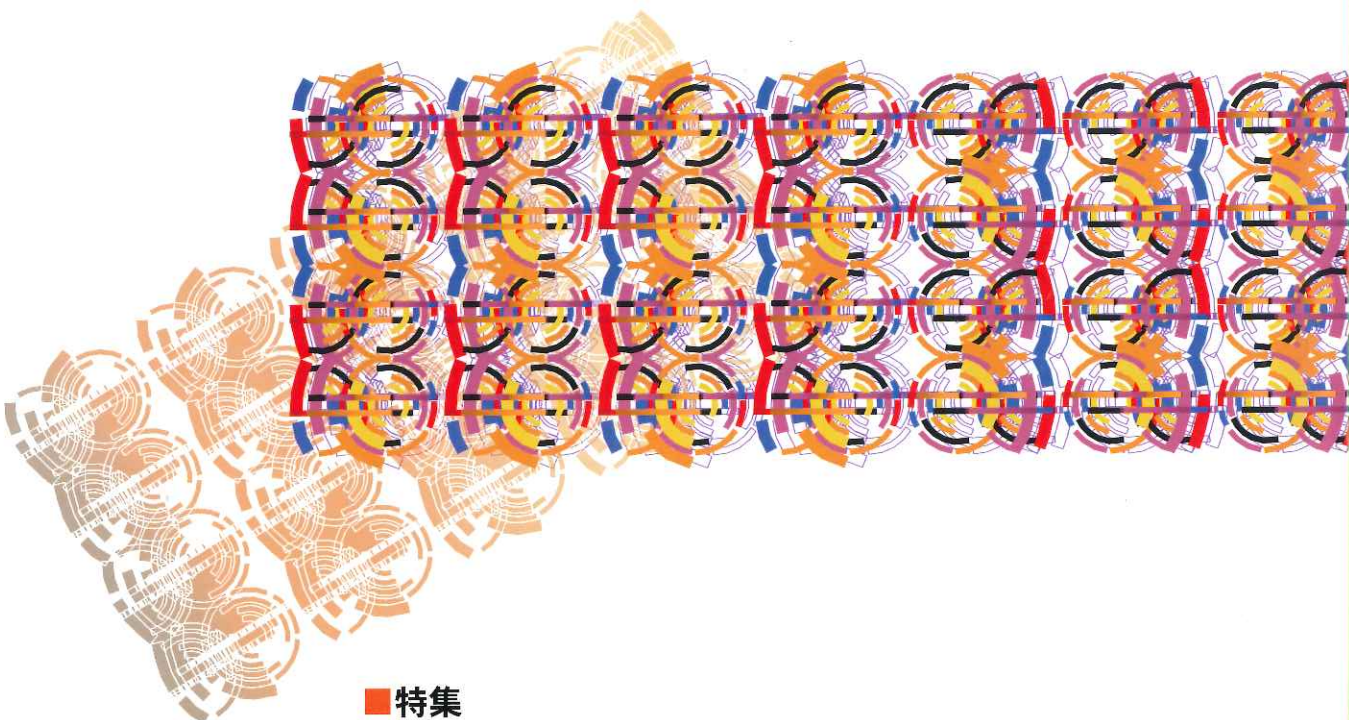


次期学習指導要領と 特別支援教育



■特集

新学習指導要領における特別支援教育

青木 隆一

特別支援学校での受け止め

北山 博通 ほか

■巻頭インタビュー

新学習指導要領の具体化に向けて

合田 哲雄

■速報

**平成29年度 全国高等学校長・
副校長・教頭異動一覧**



アサンプシオン国際中学校高等学校

21世紀型教育で未来を切り拓く

「グローバル時代に向けて教育内容を大幅リニューアル」

今回の訪問校は、大阪府北摂地域の箕面市の高台に校舎を構えるアサンプシオン国際高等学校である。同校の前身は、カトリック系の女子校として長く教育活動を行ってきた聖母被昇天学院高等学校であるが、この4月より校名を変更して共学化、英語イマージョン教育の導入などにより、再スタートを切った。大きく掲げられた看板は「21世紀型教育」。今日私たちは、知識基盤社会において新たな知を創造することが求められている。自分の頭で考え、課題を解決する力、いわゆる「課題解決力」と「創造力」が求められている。アサンプシオン国際高等学校では、聖母被昇天学院時代から培って



きた英語教育やフィールドワーク学習、社会貢献活動を発展させ、日本、さらにはグローバル社会のかじ取りを担うリーダーを育成することをめざしている。「大阪発、世界標準」の21世紀型教育の構築にチャレンジする同校を紹介している。

学校の沿革と概要

アサンプシオン国際高等学校(以下、アサンプシオン国際)の前身である聖母被昇天学院は、1839年フランスのパリで聖マリ・ウージェエによって創立されたカトリック聖母被昇天学院修道会を母胎とする学院である。1952(昭和27)年に来日した5人のシスターにより設立が準備され、1953(昭和28)年に聖母被昇天学院幼稚園が開園した。1954(昭和29)年に小学校、1960(昭和35)年に中学校、そして1963(昭和38)年に高等学校が順次開校した。家

庭的雰囲気の中、一人ひとりの人格と個性を大切にし、かけがえのない存在として認められ、自分の使命を見だし、世界で他者のために貢献できる女性の育成を担ってきた。

修道会創始者の聖マリ・ウージェエの生誕200年にあたる今年、アサンプシオン国際に校名変更し、新たなスタートを切ったところである。アサンプシオンは、聖母被昇天の英語表記で、聖母マリアが復活し天に召されたという教義を示す言葉である。

聖マリ・ウージェエは、キリスト教にのっとった教育を行い、全人的教育の必要性を主張した。その言葉のなかには、次のようなものがある。

「ここで問題とされているのは、全人的な教育です。信仰の光による健全な判断力の育成、批判的精神、思考の公正さ、恩寵への信頼を養うことに関心が払われています」

「教育は、記憶することではなく、姿勢

と道徳観を要請することです」

信仰に基づいた批判的精神・公正さによって、社会を改善し、隣人に奉仕する女性を育成する。そのためには「覚えること」ではなく、社会の課題を認識し、課題解決に取り組み姿勢や行動力を培っていくことが求められる。聖母被昇天学院では、以前より大阪の日雇い労働で路上生活する人々が多く住むあいりん地区での夜間パトロールなど社会貢献活動を行ってきた。21世紀型教育はその延長線上にある。江川昭夫校長によれば、グローバル時代に求められる教育を構想したら、結果として創始者聖マリ・ウージェエの言葉と符合したという。

これまで学院が大切にしてきた「誠実 隣人愛 喜び」という理念(モットー)をより徹底することが、現代社会に求められる力を育むことにつながっていたわけである。

また、聖母被昇天修道会は、世界30カ国以上に姉妹校の広がりがあり、約5万

人が学んでいる。交換留学など国際交流も盛んで、英語教育にも力を入れてきた。グローバル社会のコミュニケーションツールとしての英語と多文化理解・国際理解のための知識や姿勢を育んできたことも、21世紀型教育に通じているといえるだろう。

生徒は今春の入学生から「アサンプシヨン・イングリッシュ(AE)コース」「アサンプシヨン・グローバル(AG)コース」という2つのコースで学んでいる。「AEコース」は、英語力を重点的に強化するコースで、英語・数学・理科・総合的な学習の時間の4教科等(中学校では音楽も含めた5教科等)で英語イマージョン教育を行う。イマージョン(Immersion)とは、「浸すこと」「没頭」、すなわち英語漬けの教育を意味する。英語だけを使って教科等の授業を行う中で、高度な英語力育成をめざしている。

「AGコース」は、全教科等でPBL型(探究型)授業を実施する。「探究ゼミ」を「教える」というよりは、「どっぷりつかるといふような環境」を整えることで、自然な英語運用能力の育成が図られる。

英語イマージョン教育を開始するに当たって、国際基督教大学で博士号(教育社会学)を取得したギユム・アルペール氏を「イマージョン・コーディネーター」として招へいし、カリキュラム、教材を練り上げていった。教材は、日本の検定教科書に加え、イギリスやアメリカの生徒が学校で使用している教科書を併用する。英語だけでなく、数学や理科の教員も英語イマージョン教育を実践することになるので、今春までにアルペール氏の指導の下で研修を行ってきた。具体的な教科の指導に即して授業づくりが検討され、例えば、音楽では歌を歌いながら英語の発音に親しんだり、数学では一輪車等の写真を見ながら数の概念について学んだり工夫がなされている。イマージョン教育のメソッドとして、

研究発表、プレゼン、ディベート、ディスカッション、グローバル・アクティビティ(各教科における知的好奇心を高める行事)等を通じて教科横断的な力を育成する。2年次からは、「アサンプシヨン・サイエンス(AS)コース」を開講し、理系学部をめざす生徒に応じた指導を予定している。

AEコースにおいてもPBL型(探究型)授業を取り入れ、またAGコースにおいても英語イマージョン教育の波及をめざし、学校全体で英語イマージョン教育とPBL型(探究型)授業を推進している。コースの違いは強調点の置き方にあるといえるだろう。またいずれのコースにおいても、聖母被昇天修道会と縁の深いフランス語が必修なのに加え、希望者はアメリカ語学研修、フィリピン・フランス姉妹校交流プログラムが用意されている。

では、21世紀型教育とはどのような構想なのか、次に見ていこう。

21世紀型教育

アサンプシヨン国際の21世紀型教育は、知識集積を特徴とする「20世紀型教育」から脱皮し、21世紀に必要なとされる力を育むことをめざしている。グローバル化が進展し、海外に行かなくても町や職場で異文化の人々とのコミュニケーションが必要となる。また人工知能の発達により10年20年先には現在ある多くの職業が消滅するとの「予言」がなされている。これからの時代を生きる生徒たちには、創造力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が必須となる。そのために、①英語イマージョン教育、②PBL型(探究型)授業、③ICT教育を柱にした21世紀型教育が構想された。

英語イマージョン教育は、教科等の担任と英語ネイティブ教員が連携し、授業内のコミュニケーションを全て英語で行

以下の4つが挙げられている。

① 双方向の関係をつくる

教師が生徒に一方的に話しかけるのではなく、教師が生徒に質問する。教師は会話を膨らますように誘導し、生徒がそれに応えることで双方向の関係を構築する。主体的・対話的・深い学び(アクティブ・ラーニング)の基礎をつくる。

② 生徒が安心して授業に取り組める環境をつくる

教師がミスを笑ったり、厳しく叱ったりすると生徒は萎縮してしまい、学びに集中することができない。例えば、わざと教師自身が間違ってみるなど、間違っても大丈夫ということを伝え、安心して生徒が授業に取り組める環境をつくる。

③ 分からないことを一緒に考えるという雰囲気をつくる

生徒が問いに対して答えられなくても、教師は生徒に「分からない」と答えれば大丈夫であることを伝える。そして、なぜ分からないのかを生徒と一緒に

考えるといふ雰囲気をつくる。課題解決型の授業展開の第一歩である。

④ 日本語を使うのは最終手段

もし生徒に英語で話しかけたことが理解されなかった場合、すぐに日本語でフォローするのではなく、教師が説明の仕方を変える。例えば、身振り・手振りや絵を描くなど、別の方法を試し、できるだけ日本語を使わないコミュニケーションを試みるようにする。自らのことを相手に伝えることの大切さを教える。

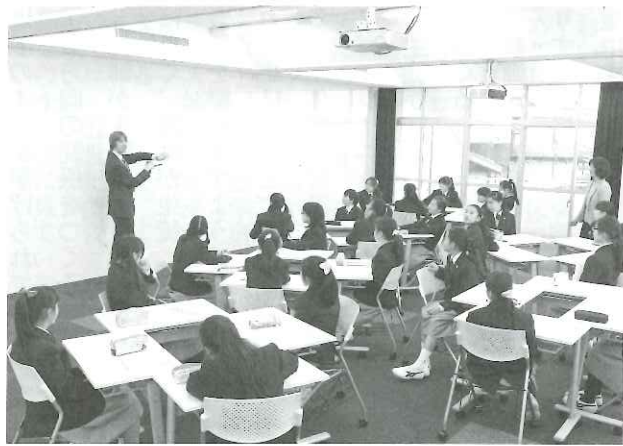
この4つのメソッドから伝わってくるのは、教師が生徒に正しい知識や用法を教えることよりも、英語を通じて主体的・対話的に学ぶ環境を整えることに力が置かれている点である。自分を表現し、仲間や教員と交わることが奨励されている。英語イマージョン教育のねらいは英語習得方法そのものが主体的・対話的な深い学びであることを認識しながら、学習者の英語運用能力向上に寄与することをめざすことになっている。

・PBL型（探求型）授業

21世紀型教育の特徴の2つ目の柱は、PBL型（探求型）授業である。PBLとは、Problem Based Learningの略で、いわゆるアクティブ・ラーニングの手法を用いた学習である。この間の教育界の議論では、アクティブ・ラーニングよりも「主体的・対話的で深い学び」という言葉を用いる方向にあるようだが、その示すところに大きな違いはない。

アサンプション国際では、全ての学習活動においてアクティブ・ラーニングの手法を取り入れることをめざしているが、なかでもその中心となるのが「探究」の時間である。「探求科」として科目設定している。「探究科」では、グループワークやフィールドワークを取り入れながら、ディスカッションやディベート、研究発表、プレゼンテーションなどを行い、中学校からの6年間を通じて「思考力」や「発信する力」を養っていく。高校の3年間では、少人数のゼミ形式で自

主的に探究したいテーマを設定し、ディベートやレポートの作成などを行う。考えを言葉や文章にすることで、論理的に考え話す力、伝える力、さらには「正解のない課題に挑戦する力」を養うことが目標とされている。1年次、2年次とレポート作成を重ね、3年次には「卒業論文」の制作にもチャレンジする。



「Future Room」

や「環境」、「人権」、「開発」、「女性」など地球規模で解決が必要な「グローバル・イシュー」である。国連が持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals goals: SDGs）として挙げる17の項目を手掛かりに学びを追究している。

アサンプション国際では、「探究科」に取り組み前の昨年度までも総合的な学習の時間を活用して、「アサンプションアワー」と名付けられた調査研究型の学習を行っていた。しかし、アサンプションアワーは単発の取り組みで、必ずしも継続的で積み上げのあるものになっていなかった。それを「探究科」として新たに科目化することで、担当の教師が学習を総合的にサポートできる体制をつくり、中学も含めた6年間を通して体系的に学習を深めていくことを狙っている。また、「探究科」に取り組むことで、他の教科等においても教師にとっては指導のノウハウが、生徒にとっては主体的・対話

的に深く学ぶ構えが広がることが期待される。

また「探究科」の授業で活用するために、壁全面をホワイトボードのように改装し、ブレインストーミングや意見交流、プレゼンテーションがしやすい学習環境（「Future Room」）を作る工夫もされている（写真）。

・ICT教育

ICT教育は、生徒たちが「発信」する力、そしてその前段階にある情報として「収集」する力を拡張することをねらいとしている。ICT機器を慣れるとともに、自然に扱える力を身に付けるために、学内で使えるタブレットや電子黒板などを整備するとともに、コンテンツの充実が図られている。

校長の哲学教室

21世紀型教育といっても、これまで知識集積型の指導・学習に慣れてきた教

師・生徒が急に変わることには難しい。まずは校長が実践してみようと、「校長哲学教室」を開催した。テーマに沿って互いに意見を交わし、答えを導き出すグループワークである。2人一組になり、1枚の写真を見て気づいたことを意見交換したり、チームに分かれて地球規模で起こる問題の解決のためのプレゼンテーションを行ったりした。最後には、グループワークを体験して気づいたことを英語でスピーチすることに挑戦した。

江川校長によると、生徒たちが導き出した答えには、期せずして、受け継がれてきたモットー「誠実 隣人愛 喜び」がしみわたっていたという。キリスト教の教育の伝統に新たな教育方法を接合した教育実践がこれから積み上げられていくことであろう。

的な雰囲気や「誠実 隣人愛 喜び」をモットーにした学校文化は受け継がれつつも、将来の進路を意識した授業改革は大きく動いている。21世紀型教育により英語の運用能力と課題解決能力などを鍛えられ、それぞれの進路を切り拓いていくことが期待されている。中学および高校入試も「思考力テスト」（情報を読み取り、その情報を用いて表現する思考過程を評価するテスト）を実施し、AECコースでは、英語能力に優れた生徒を選抜できるようにしており、アサンプション国際を選択する受験生もユニークな生徒が集まってきた。

数年後、卒業生が大学や社会でアサンプション国際の21世紀型教育で培った能力を発揮し、活躍する姿を期待したい。

「学校所在地」

〒562-8543 大阪府箕面市如意谷1丁目13番23号

TEL 072-721-3080
FAX 072-723-8880